



中ザワヒデキ Hideki Nakazawa

## プロフィール

美術家。1963年新潟生まれ。千葉大学医学部卒。1983-89年、アクリル絵画。1990-96年、バカCG。1997-2005年、方法絵画。2006年以降、本格絵画。2000年1月1日、詩人松井茂、音楽家足立智美の立会で「方法主義宣言」を発表。著書「近代美術史テキスト」「西洋画人列伝」「現代美術史日本篇」。特許「三次元グラフィック編集装置」「造形装置および方法」。CD「中ザワヒデキ音楽作品集」。

## 06

「日本洋画史における一九一三年  
—へたうまの源流としての反官フォーヴ—」

ゲスト・スピーカー / 中ザワヒデキ



2008年12月13日(土) 14時-19時

会場：workroom\*A



参加人数：12名+企画室メンバー11名

参加費：5000円 [軽食(日本近代洋画ならぬ日本近代洋食)を用意します。]

\*参加費は、当日、会場窓口にてお支払い下さい。

西欧美術における1913年は主情主義から主知主義への転換点であり、ドイツの表現主義グループ「ブリュッケ」の解散と、カンディンスキー、モンドリアン、マレーヴィチらの抽象絵画の創始が象徴的である。では日本の1913年(大正2年)はどうであろうか? 萬鉄五郎が《裸体美人》を発表し、岸田劉生、斎藤與里らが「日本的フォーヴ」の魁となったフェウザン会を結成したのが1912年で、翌1913年は同会解散の年に当たる。急進的洋画家たちによる文展第二部(洋画部門)を二科制とする建白書の提出は1913年だが、当局に拒否され初の在野団体として二科会が設立されたのは翌1914年である。「1913年は情から知への転換点」という仮説はひとまず措き、反官要素を併せ持つ主情主義としての「日本的フォーヴ」の最初の高まりとして1913年前後の時代をとらえるならば、そういえば私にも言いたいことがあった。

私は歴史法則主義の立場であり、循環史観論者である。日本現代美術史としては批判的に語られがちな1950年代後半の「アンフォルメル旋風」と、サブカルチャー文脈なため日本現代美術史には組み入れられていない1980年代前半の「へたうま」は、反アカデミズムの主情主義エネルギーの噴出として同一直線上に並んでいる。さらにそれらの源流として、1910年代の「日本的フォーヴ」を考えるのだ。西洋受容と模倣の問題、東洋アイデンティティと南画と書画とグラフィック、繰り返される「へた」と「生」の論争ほか、さまざまなテーマが見えてくる。

もともとこのLESSONという会では、「1913年という時代をよりリアルに感じるため、1913年以降のことには触れない」を原則としていたとのこと。しかし主催者側のほうから私に、「中ザワさんのときにはこの原則を破ろうと思っています」と申し出てくださいました。ご高配に感謝します。2008年現在、美術界はへたうまの対極であるマネリスムの全盛期だが、であるからこそ、やがて到来するであろう第四の「反官フォーヴ=へたうま」を占いたい。

第一部 概論：歴史法則主義の立場から「日本的フォーヴ—アンフォルメル—へたうま」を連結する

第二部 詳論：日本洋画史における一九一三年を「フェウザン会解散、二科制建白書、新南画動向」からヘイゲイする

第三部 雑論：「へたと生」「帝国主義と東洋」「梅原とホッパー」「新旧論争と色彩派」「情から知、時代/作家」他